関西自然保護機構会誌 25（2）：71－77, 2003

深泥池産絶滅危惧植物の現状と変動

同志社大学理工学研究所　光　田　重　幸

Present conditions and populatin trends of endangered plants reported from Mizorogaike Pond.

Mitsuta Shigeyuki (*Science and Technology Research Institute of Doshisha University*)

はじめに

深泥池の維管束植物の現状調査は，北村・村田（1981）以後まとまって行なわれていない。その間に池の富栄養化はますます進行し，ミツガシワやマコモ，ヨシの群落が拡大すると同時に，アメリカミズユキノシタやナガバオモダカのような渡来種の繁殖も著しい。

筆者は，「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物　植物Ⅰ（維管束植物）」（2000，環境庁編. 以下「環境省RDB」と略す），「改訂・近畿地方の保護上重要な植物」（2000，レッドデータブック近畿研究会編著. 以下「近畿RDB」と略す），「京都府レッドデータブック」（2002，京都府編. 以下「京都府RDBと略す）のいずれかに言及のある種類のうち，深泥池から報告のある種類を選んで，2001～2003年に現状調査を行なった。その結果を附表1に示す。蘚苔類については近畿RDBでは扱われていない。また，この表で示した蘚苔類の現状は，京都府RDBで報告された長谷川ほか（2002）からの引用であることを付記する。

この調査の過程で，京都府からは報告のなかったミカヅキグサ（カヤツリグサ科）が，浮島中央のビュルテ上に数十株生育しているのが発見された（2002年～2003年）。京都府RDBの刊行後であったが，本種は京都府絶滅寸前種に相当すると，科の担当者津軽氏からコメントを得た。

調査にあたり種々のご協力をいただいた京都市文化財保護局，同定と現地調査に協力してくださった亀岡市花明山植物園のスタッフと園長津軽俊介氏，深泥池水生生物研究会の皆さん，および村田源氏に厚くお礼申し上げます。

絶滅危惧植物の現状

付表1で取り上げたもののうち，江戸期に記録のあるタヌキマメとスズサイコを除くと，種数57のうち31種が絶滅もしくは現在確認できない。イネ科やカヤツリグサ科のように好期のサンプルを得なければ同定困難な分類群は，今後再確認される可能性があるが，全体的に見て約半数がすでに絶滅あるいは絶滅と見られることは疑い得ない。

これらのうち，現在危機的情況にあるものを中心に解説する。また，並行して行なった宝が池の調査結果についても，判明している限り付記することにした。深泥池の姉妹池とも言える宝が池周辺には，従来あまり注目されてこなかったが，かなり多くの危惧種がなお現存している。これらのうち湿生植物は乾燥化による衰退が著しいが，在来のミズユキノシタのように，深泥池では確認できないが宝が池には豊富に残存しているものもある。将来的に多様な遺伝子を補償すると同時に，

附表１．深泥池絶滅危惧種リスト 2003.

和　　名	RDB 京都	RDB 近畿	RDB 環境省	深泥池の産状や現状
鮮　　苔　　類				
ヤバネゴケ科				
マルバヤバネゴケ	準絶滅危惧種	*	該当なし	浮島腐植上。温帯種
コヤバネゴケ科				
アカヤバネゴケ	絶滅寸前種	*	該当なし	浮島腐植上。温帯～亜寒帯種
ウキゴケ科				
イチョウウキゴケ	絶滅危惧種	*	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅
ミズゴケ科				
ハリミズゴケ	絶滅寸前種	*	絶滅危惧Ⅰ類	シュレンケ
コアナミズゴケ	絶滅寸前種	*	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅（シュレンケ）
ヤナギゴケ科				
ヤリノホゴケ	絶滅危惧種	*	該当なし	永井報告にあるも未確認
アオモリカギハイゴケ	絶滅寸前種	*	絶滅危惧Ⅰ類	生育確認できず（秋山）
シ　ダ　植　物				
ヒカゲノカズラ科				
ヤチスギラン	絶滅寸前種	絶滅危惧種Ａ	該当なし	絶滅
イワデンダ科				
ムクゲシケシダ近似品	要注目種	*	該当なし	池畔。少ない
オシダ科				
タニヘゴ	準絶滅危惧種	絶滅危惧種Ｃ	該当なし	池畔・浮島・マコモなどの間
サンショウモ科				
サンショウモ	絶滅寸前種	絶滅危惧種Ｃ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
アカウキクサ科				
アカウキクサ	絶滅寸前種	絶滅危惧種Ａ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
種　子　植　物				
スイレン科				
ヒツジグサ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	絶滅？
ヒメコウホネ	絶滅危惧種	絶滅危惧種Ｃ	絶滅危惧Ⅱ類	開水域に少数が現存
オトギリソウ科				
ミズオトギリ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	やや普通
タデ科				
ナガバノウナギツカミ	指定もれ？	絶滅危惧種Ｃ	該当なし	局所的に群生
モウセンゴケ科				
ムジナモ	絶滅種	絶滅種	絶滅危惧Ⅰ類	巨椋池から移植後絶滅
コモウセンゴケ	絶滅寸前種	準絶滅危惧種	該当なし	絶滅。トウカイコモウセンゴケの可能性も
モチノキ科				
ミヤマウメモドキ	絶滅危惧種	絶滅危惧種Ｃ	該当なし	池畔などに少数生存
アカバナ科				
ミズユキノシタ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	現在確認できず
アリノトウグサ科				
オグラノフサモ	絶滅寸前種	絶滅危惧種Ａ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
タチモ	絶滅危惧種	絶滅危惧種Ｃ	準絶滅危惧種	絶滅
フサモ	絶滅寸前種	絶滅危惧種Ａ	該当なし	絶滅
セリ科				
ドクゼリ	準絶滅危惧種	絶滅危惧種Ｃ	該当なし	やや少ない
ハイノキ科				
クロミノニシゴリ	絶滅寸前種	絶滅危惧種Ａ	該当なし	池畔などに少数生存
ミツガシワ科				
ガガブタ	絶滅寸前種	絶滅危惧種Ａ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
アサザ	絶滅種	絶滅危惧種Ａ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅

深泥池絶滅危惧種リスト2003続き.

和　　名	RDB京都	RDB近畿	RDB環境省	深泥池の産状や現状
タヌキモ科				
ノタヌキモ	絶滅危惧種	該当なし	該当なし	絶滅
フサタヌキモ	絶滅種	絶滅危惧種A	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅
イトタヌキモ（ミカワタヌキモ）	絶滅寸前種	絶滅危惧種A	絶滅危惧Ⅰ類	泥固着型と浮遊型がある
コタヌキモ	絶滅種	絶滅危惧種A	該当なし	絶滅。かつて自生もあった
ヒメタヌキモ	絶滅寸前種	絶滅危惧種A	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
ホザキノミミカキグサ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	やや普通。シュレンケ
タヌキモ	絶滅寸前種	絶滅危惧種A	絶滅危惧Ⅱ類	開水域に普通にある
ムラサキミミカキグサ	絶滅寸前種	絶滅危惧種C	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
キキョウ科				
サワギキョウ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	やや普通にある
キク科				
スイラン	絶滅危惧種	該当なし	該当なし	シュレンケに少数生存
オモダカ科				
マルバオモダカ	絶滅種	絶滅危惧種A	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
アギナシ	絶滅危惧種	絶滅危惧種A	準絶滅危惧種	絶滅
トチカガミ科				
トチカガミ	絶滅危惧種	絶滅危惧種C	該当なし	絶滅
ホロムイソウ科				
ホロムイソウ	絶滅寸前種	絶滅危惧種A	該当なし	浮島上に局所的にある
アヤメ科				
カキツバタ	準絶滅危惧種	絶滅危惧種C	絶滅危惧Ⅱ類	やや普通
ホシクサ科				
クロホシクサ	絶滅危惧種	絶滅危惧種A	絶滅危惧Ⅰ類	非常に少ない。シュレンケ
イネ科				
ムツオレグサ（ミノゴメ）	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	確認できず。なお調査が必要
ハイチゴザサ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	確認できず。なお調査が必要
アシカキ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	絶滅？
ヌマガヤ（カミスキスダレグサ）	絶滅寸前種	該当なし	該当なし	シュレンケに十数株現存
ミクリ科				
ヤマトミクリ	絶滅危惧種	絶滅危惧種C	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
カヤツリグサ科				
シカクイ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	絶滅？
イヌノハナヒゲ	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	シュレンケに似たものあり。
オオイヌノハナヒゲ	絶滅危惧種	絶滅危惧種C	該当なし	シュレンケに普通
コイヌノハナヒゲ	絶滅寸前種	該当なし	該当なし	絶滅？
ミカヅキグサ	＊絶滅寸前種	絶滅危惧種C	該当なし	＊津軽氏による。京都府新産
コマツカサススキ	絶滅危惧種	該当なし	該当なし	シュレンケに少数生存
ラン科				
ザギソウ	絶滅寸前種	絶滅危惧種C	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅
トキソウ	指定もれ？	絶滅危惧種C	絶滅危惧Ⅱ類	浮島上に局所的にある
カヤラン	準絶滅危惧種	該当なし	該当なし	池畔の樹幹に着生
参考（江戸期の記録）				
マメ科				
タヌキマメ	絶滅危惧種	絶滅危惧種C	該当なし	現在見当らず
ガガイモ科				
スズサイコ	絶滅危惧種	絶滅危惧種C	絶滅危惧Ⅱ類	現在見当らず

深泥池から絶滅した植物の復元に有効かもしれない。

ハリミズゴケ（ミズゴケ科）

オオミズゴケと異なり，冬季冠水するようなビュルテ外縁部に生育する種類である。群落の退行が

著しいことはすでに指摘されてきているものであるが，近年いっそう情況が悪化し，群落と呼べるものは数ヵ所でしか見られなくなっている。塩素を含んだ水の流入が改善され，今後回復する可能性もあるが，群落の消長についてモニタリングが必要であると考えられる。

なお，京都府RDBでは，「府下では深泥池にのみ見られる」と記されているが，宝が池にも少数それらしいものがわずかに残存している。現在同定依頼中である。

ヒメコウホネ（スイレン科）

二ヶ所の群落が見られる。東南水源地近くの群落は大きく，ジュンサイやタヌキモとともに生育している。この群落にマコモが侵入し，ヒメコウホネの生育がおびやかされ始めたので，2002～2003年に深泥池水生生物研究会のメンバーによってマコモの刈り取りが行なわれた。根茎が分岐して殖えるため個体数の確定は難しいが，約70株が順調に生育している。もう一つの群落は学生マンション近くにあり，数株の小群落である。三年の間に，個体数の大きな変動はない。本種は宝が池からは知られていない。

ミヤマウメモドキ（モチノキ科）

東南水源地近くにある雌株と，南岸にある雄株が知られる。雌株は一時期根元の踏み付けのために勢いが衰えたが，立ち入りを制限した結果樹勢を回復し，2003年には多数結実した。挿し木と実生による後継樹の育生も，市民団体有志によって行なわれている。現在のところ差し迫った問題はないが，周辺の木々が生長して暗くなっている点の改善が課題である。本種は暗くなると急速に衰退する種類である。

2003年10月の宝が池調査によって，本種と思われるもの（雄株）が発見された。正確な同定には花を確認する必要があり，研究を継続中である。

ミズユキノシタ（アカバナ科）

移入種のアメリカミズユキノシタと同様の生態を有する多年草である。今回の調査では確認できなかったが，どこかに残存している可能性は残る。葉が互生であること，果実が丸みを帯び果柄がごく短い点でアメリカミズユキノシタと区別できる。府下でもかなり減少しており，近くでは亀岡市や京田辺市になお見られるものの，個体数は多くない。深泥池に残存していれば，保護・増殖が望ましい。

なお2003年10月の宝が池調査で，池の一角に残存しているのが発見された。ハナショウブ園を中心とするかなり人工的な環境であり，第二の渡来種の可能性もあったため，渡来水草に詳しい山崎美津夫氏に問い合わせたが，アメリカミズユキノシタ以上にミズユキノシタに類似した種類は，国内に入っていないとの回答を得た。現場には清浄な水域に生育するオオバタネツケバナやサヤヌカグサもともに生育しており，自生のものと見られる。

クロミノニシゴリ（ハイノキ科）

京都府RDBでは，誤ってクロミノサワフタギの名で出ている。担当者の勘違いであり，記述とあわせて訂正が必要である。

本種も2003年にはよく結実し，ミヤマウメモドキ同様に差し迫った問題はないと考えるが，やや老木化したせいか，樹勢が衰えてきているように見える。若木は見られず，種子による更新を準備する段階にあると思われる。

2003年10月の宝が池調査で，本種と思われるものが池近くの森林化した湿地で発見された。暗いためか結実は見られず，正確な同定にはなお研究を要する。

イトタヌキモ（ミカワタヌキモ）（タヌキモ科）

シュレンケ外縁の一部だけに見られる泥固着型と，水面近くを漂う浮遊型とがある。両者は同じ種類と見られているが，後者をナガレイトタヌキモとして区別する見解もある。

泥固着型は，この数年個体数に大きな変動は見られない。正確な個体数を数えることは生育形態上困難であるが，ごく小さな群落が15～20程度確認できる。結実もしており，京都市文化財保護局の予算で，種子保存ならびに無菌培養も行なわれ，系統保存に成功している。浮遊型は従来多かったが，近年ジュンサイが急激に群落を拡大し，その陰になって減少が著しい。この型は，水面近くでマット状にかたまった場合のみ開花し，毎年開花が見られるものの，種子の採取には成功していない。一部の入江ではアオミドロ類に巻かれて消失した。

本種は京田辺市に一群落があったが，2002年に生育地に土砂がたまり，乾燥化して消滅した。深泥池の群落は，現在では府下唯一のものと見られる。

スイラン（キク科）

京都府の絶滅危惧種に指定されている種類である。かつて東南部の水源近くのシュレンケに群生があったが，その場所では消滅した。北村・村田(1. c.)では「絶滅？」と記されている。その後，深泥池自然観察会の田末氏によって，浮島の南外縁部に約4株が現存しているのが発見され，筆者も確認した。絶滅のおそれが高く，種子による保存が急務と考えられる。宝が池の自生地では，2002年までは確認できたが，2003年には消滅した。乾燥化が進み，ケネザサが繁って暗くなったことが直接の原因である。

クロホシクサ（ホシクサ科）

環境省RDBで絶滅危惧ⅠB類に指定されている。一年草であり，個体数はもともと不安定な変動を示す。シュレンケ外縁部に100～200個体前後が毎年発生しているが，発生地は数平方メートルに満たない狭い区域である。個体のかなり多くは高さ数センチに満たない不完全生育個体であり，十分に生育した個体は数えるほどしかない。定期的なモニタリングが必要である。種子が採取され，保存されている。本種は府下では京田辺市甘南備山からも報告されているが，現在は見られない。深泥池の群落は，府下唯一のものと見られる。

ムツオレグサ（イネ科）

水湿地に生える多年草で，条件が良ければ大群生することもある種類である。北村・村田(1. c.)によれば，岸に少数認められるとされているが，今回は確認できなかった。花（果）穂がなければ同定の難しい種類であり，なお調査が必要であるものの，同様な生態的地位にあるキシュウスズメノヒエ（渡来種）やマコモに生育場所を奪われた可能性が高いと見られる。本種は宝が池からは知られていない。

ヌマガヤ（イネ科）

近畿地方全体では珍しいものではないが，府下では非常に稀で，京都府の絶滅寸前種に指定されている。今回浮島中央部のシュレンケに十数株まとまって残っているのを確認した。それぞれの株は8～12本立ちで大きいが，下部が浮き上がった老株であり，若苗を見ない。沼地に生える大型の種類で，景観上の価値もある。近い将来の絶滅が憂慮される。種子を採取するなどして，保存・育生を検討すべきである。本種は宝が池からは報告されていない。深泥池のものは府下唯一の確実な産地と見られていたが，2003年10月に南山城

村童仙房でまとまった群落が発見された。

ミカヅキグサ（カヤツリグサ科）

最初の発見時には十数株が認められたが，2003年10月の再調査によって別な群落が見つかり，総計50株前後と見られる。生育・結実状態ともに良好である。

本種はオオミズゴケが盛り上がったビュルテに生育し，シュレンケに生える同属のオオイヌノハナヒゲとは生育地を異にするが，まれに同所的にも見られる。2003年10月に種子を採取し，保存に回した。

コマツカサススキ（カヤツリグサ科）

これまであまり注目されてこなかったが，府下では近年の減少が著しい種類であり，京都府の絶滅危惧種に指定されている。深泥池ではビュルテの一角に4株が残っている。結実状態は良好であるが，若苗を見ない。種子による保存や育生が必要と考える。本種は宝が池にも4株が現存している。

カヤラン（ラン科）

これまでに報告されたことはないが，池畔の樹幹に着生した二個体が，深泥池水生生物研究会の宮本水文氏らによって発見されている。2003年春には成熟した果実が採取され，EPMP研究会のメンバーによって無菌培養が試みられた。現在多数の幼苗が生育中である。本種のプロトコームは扁平で，着生シダ植物の前葉体を思わせる特異なものであることが明らかになった。宝が池からは未報告である。

コブシ（モクレン科）

リストには挙げていないが，東南部水源地近くの水湿地で，2003年10月にコブシ二株が発見された。本種は京都府の準絶滅危惧種に指定されている。樹高1.2 mと3 m前後の若木である。開花するような成木は見つかっていない。深泥池からは新記録である。

コブシは水湿地に生育する種類であり，深泥池での産状は自然である。ただ，本種は公園などに植栽されることがあり，そこから種子が鳥などによって運ばれた可能性を否定できない。今後池周辺で成木が発見されれば，自生と判定しえるかもしれない。

この他に，景観を含めて重要な稀少種には，タヌキモ，サワギキョウ，ホロムイソウ，トキソウなどがあるが，さしせまった絶滅の惧れはやや少ないと考えられる。

渡来植物が与える影響

すでに言及したが，ムツオレグサは同様の生態的地位にあるキシュウスズメノヒエに，ミズユキノシタはアメリカミズユキノシタにとって変わられ，深泥池から消失した可能性が大である。アメリカミズユキノシタは在来のミズユキノシタに比べて開花率・結実率ともに高く，切断された茎からも容易に再生・定着する。岸辺と浮島外縁に生育しており，完全な除去は非常に難しい。岸辺のものは刈り取りが定期的に行なわれ，一部を除いてあまり目立たないが，浮島外縁に生育するものは沈水形態となり，見かけ以上に多量にある。早急な対策が必要であろう。

ナガバオモダカは，東岸のチンコ山基部から東南水源地近くのものについて，2002年夏に除去が行なわれた。除去は市民団体の協力によって，手作業で根から抜き取る方法で行なわれた。一年後の状態では，いくらか抜き取り漏れによる個体はあるが，ほぼ完全に消失した。本種は春から初夏にかけて盛んに走出枝を延ばすため，抜き取り

は走出枝先端からの緑葉が水上に出て確認しやすくなる夏から秋が最良と思われる。走出枝を取り残すと，容易に再生する。本種は密な純群落を形成するため，岸近くに繁茂すると在来の抽水性水草の生育地を奪うことになる。

2002年から2003年にかけて，南の開水域でオオカナダモが大繁殖している。本種は基本的に池底に根をおろし水面近くまで伸長する生活型をもつ。とくにエリ網設置付近で繁殖が著しい。エリ網の捕獲効果に問題が生じるだけでなく，同様の生活型をもつジュンサイやマツモと競合関係にある。2003年の夏から秋にかけてボート4艘分を除去したが，それでもごく一部にとどまっている。ボート100艘分ほどあると思われ，腐敗が始まる前に除去する必要がある。

このほかの渡来植物には，アメリカセンダングサ，セイタカアワダチソウ，メリケンカルカヤなどがあり，いずれも岸近くと浮島上の両方に見られるが，現時点ではそれほど大きな影響は見られない。

引用文献

環境庁自然保護局野生生物課（編）. 2000.「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 植物I（維管束植物）」, 自然環境研究 センター. 東京.

北村四郎・村田源. 1981. 深泥池とその周辺の植物相.「深泥池の自然と人」（深泥池学術調査団編）, 55－82. 京都市文化観光局 文化財保護課. 京都

長谷川二郎・秋山弘之・土永浩史・木村全邦. 2002. コケ植物.「京都府レッドデータブック2002」（京都府企画環境部環境企 画課編集・発行）, 上巻506－584. 京都.

光田重幸. 2002. シダ植物.「京都府レッドデータブック 2002」（京都府企画環境部環境企画課編集・発行）, 上巻 586－639. 京都.

村田源・角野康郎・高木俊夫・田中徹・津軽俊介・西沢信一. 2002. 種子植物.「京都府レッドデータブック 2002」（京都府 企画環境部環境企画課編集・発行）, 上巻 640－877. 京都.

レッドデータブック近畿研究会（編著）. 2001.「改訂・近畿地方 の保護上重要な植物」125－143. 平岡環境科学研究所. 川崎.